

『自由』という

ことばに寄せて

島田 美穂

西欧の思想が導入されて用いられるようになった『自由』という日本語の使われ方と、もとの欧米人の自由の意識の差について、以前から何となく気になっていたので、思いつくまま、とりとめないことを述べてみます。

念のため三人ばかり親しい英語圏の外人にフリーダムについての意見を聞いてみました。それぞれ、国柄、人柄によるニュアンスの違いはありますが、要は自由とは戦い獲るべきもの、他の支配を受けないためつねに怠りなく自らが維持しなければならない、人間にとって第一義的な権利であり義務であって、ことば自体は平和、愛などと同様、当然すぎて特別な意味はないとのこと。辞書ではフリーとはまづ奴隷状態からの解放を意味します。

これらは日頃欧米人に接して感じられる通りの答で、恐らく現在の日本人には抵抗なく

受入れられる考え方も知れませんか。しかしこの自己と周囲の世界との鋭い対立感、絶えず外に向う攻撃的な姿勢は、もともと日本の社会や日本人のものの考え方とびつたりするものだったでしょうか。その発想法に対して何らの違和感もなかったでしょうか。

では過去に私たちの文化の中に自由ということばは全然なかったかと考える時、思い浮ぶのは自由無碍、自由自在などの仏教文化の中で、もっと自然で親しかったことばです。

思うにこれは内的、精神的自由で、自我との戦い、自己改革、自己滅却の道であり、心の欲するところを行って法を越えずとか、心頭を滅却すれば火も又涼しとかいった境地は、もはや外部条件を超越した廣大無辺、高次元の自由で、これが私たちの文化の中で志向された自由だったと云えないでしょうか。

勿論現代社会の中では、ただ内的世界に止まることは不可能で、自己改革は同時に外に自己の条件を主張し、外部改革に向わなければならないのが当然でしょうが、西欧では意識されず開拓されなかった深く豊かで力強い内的世界がわれわれの文化にはありました。

過去数世紀、西欧は外に向って拡大しつづけ、攻撃し征服することに急で、その思想も

止まって内省に向うより、社会的政治的志向で展開してきた文化でした。二つの大戦を経て急速に縮小した西洋では、いま思想的にも転換を余儀なくされ、東洋に近づきそこから何かを摂取しようとする傾向が目立ってきています。フランスに禅道場がつくられ、そこでの真摯な求道の姿は、禅の真髄は形骸化した日本の場を去って西欧に行くことになりかねないという声さえあるほどです。

深夜、寝しづまった京都の街のか細い小路の中まで傍若無人に走り廻るオートバイのけたたしい爆音に耐えながら、私の心に戦後の日本社会に君臨したことばの一群が浮んできます。戦後は近代化を徹底させるために特にこれらを強調しなければならぬ時期だったかと思えます。しかし西欧の理念の方向のみが唯一の望ましいものだったでしょうか。

(しまだ みほ 文学部教授)

